「この人 33」

秋月裕子 80歳 兵庫県

編集部　滑稽俳句を始められたきっかけは？

秋　月　俳句は、以前、四十歳代に始めたことがあったのですが、その時は、家事に追われて続きませんでした。直接のきっかけは、朝日新聞の記事を読んだことでした。新しい俳句の魅力に引かれ、また、世の中の事にも関心を持ち続けていたいと思いました。

編集部　俳句における「滑稽」とは、どのようなものだとお考えでしょうか。

秋　月　深い事は解らないのですが、少しでも明るく楽しくなる、「くすっ」と笑いが生まれるものだと思います。ですから、作るときも楽しく作るのが一番ですね。また、世の中の動きに対して関心を失うことなく、第六感を大切にすることが大事だと思います。

編集部　滑稽俳句を続けていて良かったことは？

秋　月　思うような句ができず、苦しい時もありますが、楽しいことです。また、会報で全国の会員の皆様のご様子、句を拝見できるのも楽しいですね。作って楽しい、読んで楽しいです。

編集部　これからも、楽しい俳句をたくさん詠まれて、ご投句くださいますよう。

＜代表句＞

摘んで呉れと光を放つ蓬かな
マージャンで老の頭脳を耕せり
田圃の水で半身浴の蛙かな
仕事か遊びか横顔みせて祭笛
丑三つ時草木眠れぬ残暑かな

掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。